

協会活動の思い出と 今後への期待



コベルコ建機(株) OB 小林 真人

令和の始まった年に協会創立70周年を迎えられたことについて、これまで協会の運営にご尽力いただいた多数の関係者の方々に敬意を表するとともにお喜び申し上げます。

さて、私は平成時代後半の10数年にわたって運営幹事会、機械部会、製造業部会、標準部会、シンポジウム実行委員会、日本建設機械要覧の総論章の執筆等、多岐にわたって協会活動に携わってきました。この期間は、オフロード法への対応等、建設機械メーカーにとって大きな課題が山積しており、建設機械メーカーの委員のみならず様々な関係者の皆様のご協力を得てそれらの課題に取り組めたことを心より感謝いたします。なかでも強く思い出に残っている活動のひとつが、JCMAS H 020「土工機械—エネルギー消費量試験方法—油圧ショベル」の2010年版改定作業への参画です。かつて、油圧ショベルをはじめとする建設機械の燃費に関しては統一的な測定標準がなく、各メーカーがそれぞれ独自の方法で燃費を計測していました。そのため、機械を使用するユーザにとっても機械を開発するメーカーにとっても燃費を客観的に比較評価する共通の尺度がなかったと言えます。そのようななか、本協会では長年にわたり建設機械の燃費測定標準の策定作業を精力的に行い、現時点では油圧ショベル、ホイールローダ、ブルドーザならびにホイールクレーンの4機種についてJCMASが制定されています。JCMAS H 020の2010年版では、内燃機関を動力とする標準型の機械に加え、ハイブリッドタイプや電動タイプなどに対応した「エネルギー消費量試験方法」へと大幅な改定が行われました。これにより、2010年当時の主要建設機械の燃費を測定することが可能となり、国交省は2006年オフロード法適合機（標準型）のJCMAS燃費をもとに2020年燃費基準を定めるとともに、低炭素型建設機械、燃費基準達成建設機械の認定が順次開始されました。その後実施された国による省エネ型建設機械の各種普及促進事業では、低炭素型建設機械の認定あるいは2020年燃費基準達成が補助

対象機種要件の一つとなり、ICT建機を含む省エネ型建設機械の開発や普及を力強く促進することになったと思います。建設機械の燃費測定標準と燃費基準を定めているのは現時点でも我が国だけであり、当時の活動が如何に画期的なものであったかがおわかりいただけると思います。今後、省エネ型建設機械のより一層の普及により、国内のみならず世界中の建設施工現場でのCO₂削減に大きく寄与することを願っております。

また、本協会での活動を通して感じたこととして産官学の関係者の方々の連携の重要性が挙げられます。2006年、2011年ならびに2014年オフロード法への対応では、機械部会の原動機技術委員会や製造業部会が原動機メーカーと建設機械メーカー間での情報共有や意見集約を行い、日本建設機械工業会と連携して関係省庁との折衝に当たるなどして、環境性能に優れた機械を遅滞なく市場に供給することを実現してきました。燃費測定標準の策定に関しては、機械部会の機種別技術委員会を活動主体として燃費測定に関する専門家を交えた検討WGでJCMAS案を練り上げ、標準部会の審議を経てJCMASとして制定されました。本JCMASでは規格本体に加え「解説」の部分で制定・改定の趣旨や制定上の経緯・課題についても詳しく説明されており、JCMAS制定に関わられた当時の委員の方々のご苦勞が偲ばれます。建設施工現場での安全性に関しては、建設業部会から機械部会・製造業部会に対して有益な情報提供と提言が行われるなど、建設機械メーカーと建設機械のユーザがともに会員である本協会の特長が最も活かされる課題であると感じました。

思い出は尽きませんが、i-Constructionの一層の推進や建設機械施工の安全性の向上についても本協会がこれまで以上に積極的に取り組まれ、グローバルに展開可能な成果をあげられることを祈念して筆を置きます。長年ありがとうございました。